

2022/5/1

ヨハネの黙示録 講解メッセージ⑥

『黙示録を読むに当たって

ー神の国は来たーマタイの福音書から学ぶ』

ヨハネの黙示録を読むにあたり、聖書は神の国についてどのように教えているのかを見ました。今回は、マタイの福音書からそれを学びましょう。

「しかし、わたしが神の御霊によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです。」(マタイ 12:28)

イエス様は「神の国はもう来ているのです」と言われました。ダニエルによって預言された終わりの日は、イエス・キリストが来られたことで成就したことがわかります。

聖書の「終わりの日」の預言は、死が終わって、神の国で永遠のいのちを手にする時という事です。イエス様は宣教の開始にあたり、「神の国は来た」と宣言なさいました。つまり、イエス・キリストを通して、神の国の預言は成就したということです。「神の国は来た」とは「終わりの日は来た」ということになります。そして、私たちに待っているのは、この体が天の御国に引き上げられる時です。

つまり、「終わりの日」には二つの意味があって、イエス様を信じるようになって永遠のいのちをいただき古い自分に死んだ日であり、この地上で肉体の死を迎え霊の体でよみがえる日、つまり自分にとってこの世界が終わる日です。終わりの日を迎え、終わりの日に至るまでの間にことについて、イエス様はどのように語っておられるのでしょうか。

■ 気をつけるべきこと

「イエスが宮を出て行かれるとき、弟子たちが近寄って来て、イエスに宮の建物をさし示した。そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「このすべての物に目をみはっているのでしょうか。まことに、あなたがたに告げます。ここでは、石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してありません。」イエスがオリーブ山ですわっておられると、弟子たちが、ひそかにみもとに来て言った。「お話してください。いつ、そのようなことが起こるのでしょうか。あなたの来られる時や世の終わりには、どんな前兆があるのでしょうか。」(マタイ 24:1-3)

「あなたが見ているものは全部崩れる」とは、肉体の死を象徴的に語ったものです。その時にはどんな前兆があるのかを弟子たちが尋ねると、イエス様は象徴的な言い方で、これから起こることをお話しになりました。このような象徴的な言い方を黙示文学と言います。個々の具体的事象に言及するのではなく、象徴的な表現によって、私たちすべてのものに起こることであると伝えておられるのです。

「そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「人に惑わされないように気をつけなさい。わたしの名を名のる者が大ぜい現れ、『私こそキリストだ』と言って、多くの人を惑わすでしょう。また、戦争のことや、戦争のうわさを聞くでしょうが、気をつけて、あわてないようにしなさい。これらは必ず起こることです。しかし、終わりが来たわけではありません。民族は民族に、国は国に敵対して立ち上がり、方々にききんと地震が起こります。しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。」(マタイ 24:4-8)

終わりの日の前兆のひとつは、惑わす者が現れるということです。実際に「私こそキリストだ」と言わなくても、「ここに救いがある」と惑わす者が大勢現れます。また、戦争や災害などの話を聞きますが、それは産みの苦しみの初めであって、本当の苦しみはほかにあるとイエス様は言われました。いつの時代にも何らかの苦しみがあり、私たちは死ぬまでに多くの苦しみを体験することを、イエス様は示されました。

「そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。また、そのときは、人々がだれもつまずき、互いに裏切り、憎み合います。また、にせ預言者が多く起こって、多くの人々を惑わします。不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。」(マタイ 24:9-13)

弟子たちは多くの迫害に会いました。私たちクリスチャンもこの世から迫害を受けることがあります。それは、イエス様が、世の人々にとって「つまずきの石」だからです。「つまずきの石」とは、世の中の理性では納得できないという意味です。

例えば、「行いに関係なく人を救う」というのも、つまずきの石です。この世の価値基準は、頑張れば報酬が得られるというものですから、善い行いや徳を積んだら救われると言われたほうがよっぽど納得できるのです。そのほかにも、イエス・キリストが罪人と共に食事をしたことや、「私の血を飲み、私の肉を食べる者は永遠に生きる」と語ったことでも、多くの人がつまずき去っていきました。そして、イエス様が十字架にかかるまで

もがつまづきました。イエス様は自分がよみがえることを前もって弟子たちに伝えてあったのですが、誰も信じることができませんでした。

これらのことは、神の言葉は信仰でしか食べられないということを私たちに教えています。聖書は理性で納得するものではなく、信仰で読むものです。あなたを苦しめているのは、あなた自身の考え方です。信じることで、自分を脱ぎ捨てるように聖書は私たちを導きます。しかし、理性で自分を納得させようとして生きている人には、神の言葉はつまづきになります。その結果、迫害が起こるわけです。

また、御言葉につまづくところには、耳障りのいい話をする人が現れます。聞く人にとって都合のいい話をして人を引き付けようとするのです。さらには、多くの人が自己中心的になります。

しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。「救われる（ソーズー）」は、「いやされる」と同じ言葉です。忍耐とは、どんな惑わしがあっても、神のことばを信じ続けることです。神のことばを信じ続けるならば、神との関係は豊かになり、罪がいやされたことを実感するようになるのです。

■ まことの苦しみ

「この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかされ、それから、終わりの日が来ます。」（マタイ 24:14）

弟子たちは、これから聖霊の力を受けて、福音を宣べ伝えるために全世界に出ていきます。しかし、その宣教の途中で多くの弟子が殉教しました。それが彼らの終わりの時です。誰の人生も、途中で終わりが来るわけです。これが患難よりもはるかに大きな苦しみをもたらします。

「それゆえ、預言者ダニエルによって語られたあの『荒らす憎むべき者』が、聖なる所に立つのを見たならば、（読者はよく読み取るように。）そのときは、ユダヤにいる人々は山へ逃げなさい。屋上にいる者は家の中の物を持ち出そうと下に降りてはいけません。畑にいる者は着物を取りに戻ってはいけません。だがその日、哀れなのは身重の女と乳飲み子を持つ女です。ただ、あなたがたの逃げるのが、冬や安息日にならぬよう祈りなさい。そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、ひどい苦難があるからです。もし、その日数が少なくされなかったら、ひとりとして救われる者はないでしょう。しかし、選ばれた者のために、その日数は少なくされます。」（マタイ 24:15-22）

『荒らす憎むべき者』とは、悪魔を象徴する言葉です。悪魔とは死をつかさどる者であり、聖なる場所とは神の神殿がある場所のことです。神の神殿、それは私たちの体です。体が滅びると、イエス様を信じていない者の魂は神に返却され、信じている者は天の御国に引き上げられます。これが終わりの時です。

死が訪れることは避けられませんが、神はただ死を受け入れろと言っているわけではありません。死を避けようとしてよいと語られています。その間の苦しみは避けられませんが、これが大切な時となるのです。それは、死に向き合うことは、本当に自分を生きているかを問うことになるからです。他人の期待に応えて生きているだけではないか、自分でなくてもいい人生を生きてはいないかを、ぜひ問うてみてください。死に向き合うことで、今あなたが抱えている問題、争い、憎しみ、思い煩いなどは、本当に重要なことなのかを問うてみてほしいのです。おそらく多くのことが、あなたにとって問題ではなくなることでしょう。もっと大事なことに気づくはずです。それは、イエス・キリストです。キリストとしっかりつながっていなければ、不安なことに気づくのです。イエス様は、神の国と神の議を第一に求めなさいと言われました。しかし、誰もが惑わされ、どうでもいいことを問題にして思い煩っているのです。

「患難や戦争のうわさを聞く」とありますが、使徒たちの時代には、実際にユダヤ戦争が起きました。しかし、それよりも恐ろしいのは、自分自身の死と向き合うことです。

「そのとき、『そら、キリストがここにいる』とか、『そこにいる』とか言う者があっても、信じてはいけません。にせキリスト、にせ預言者たちが現れて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしるしや不思議なことをして見せます。さあ、わたしは、あなたがたに前もって話しました。だから、たとい、『そら、荒野にいらっしゃる』と言っても、飛び出して行ってはいけません。『そら、へやにいらっしゃる』と聞いても、信じてはいけません。」(マタイ 24:23-26)

「死を目前にしたときこそ、しっかり神の言葉に立ちなさい。」と語られています。恐ろしさと不安によって、何か手立てはないかと惑わされるのではなく、神の言葉を第一にし、すがりましょう。これが本当にできるようになるのは、死を意識した時なのです。これこそが真に神との距離を縮めるものです。死と戦うことは、神との関係を豊かにします。死を解決できるのはイエス様だけです。イエス・キリストだけが大切なものだ気づき、神と共に生きていく選択をするチャンスになります。ただし、それは同時に誘惑の時でもあります。「試練」と「誘惑」は同じ言葉(ペイラスモス)です。苦しみの中、自分の死と向

き合って正しい生き方の選択を迫られることで、苦しみは素晴らしい栄光の時になるのです。

「人の子の来るのは、いなづまが東から出て、西にひらめくように、ちょうどそのように来るのです。死体のある所には、はげたかが集まります。だが、これらの日の苦難に続いてすぐに、太陽は暗くなり、月は光を放たず、星は天から落ち、天の万象は揺り動かされます。そのとき、人の子のしるしが天に現れます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。人の子は大きなラッパの響きとともに、御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで、四方からその選びの民を集めます。いちじくの木から、たとえを学びなさい。枝が柔らかになって、葉が出て来ると、夏の近いことがわかります。そのように、これらのことのすべてを見たら、あなたがたは、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい。」

(マタイ 24:27-33)

死から逃れようと戦い、死と向き合う中で、肉体の死は突然やってきます。人は悲しみますが、その時、神が来られるのです。私たちがどこで死を迎えたとしても、神は必ずその人を迎え入れよみがえらせます。世の中は死を悲しむかもしれませんが、その時、神の栄光が現れているのです。

■ 死を迎える備え

「まことに、あなたがたに告げます。これらのことが全部起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません。この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようなからです。洪水前の日々は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は、飲んだり、食べたり、めとったり、とついだりしていました。そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が来るのも、そのとおりです。」(マタイ 24:34-39)

肉体の死は必ず訪れますが、神の約束の言葉は滅びることがないと、イエス様は弟子たちを励ましておられます。

肉体の死がいつ訪れるかは誰にもわかりません。だから、普段から神との交わりを豊かにし、心を整えて注意しなさいとイエス様は勧められています。

「そのとき、畑にふたりいると、ひとりを取られ、ひとりが残されます。ふたりの女が臼をひいていると、ひとりを取られ、ひとりが残されます。だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。」

(マタイ 24:40-42)

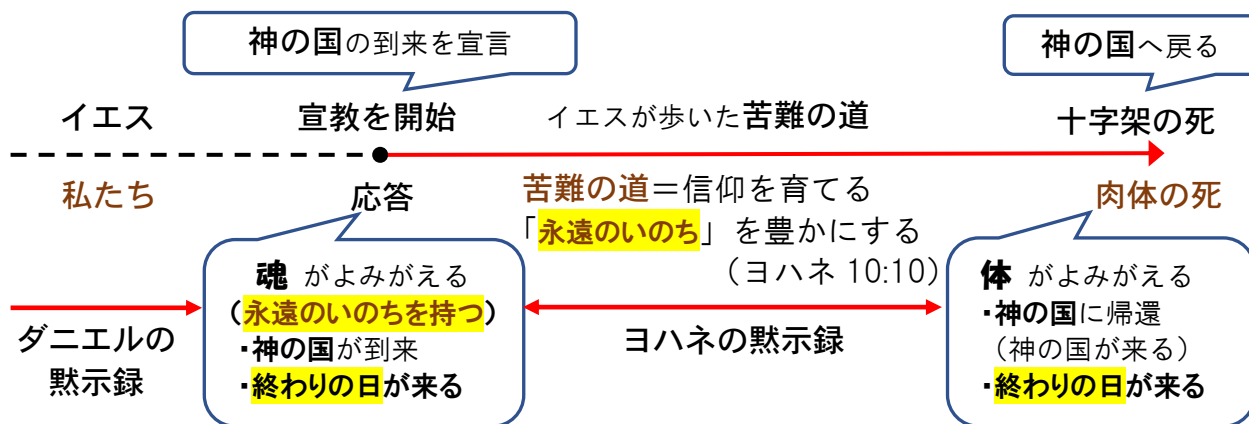
死を迎えるときは、一人ひとり異なるということです。いつ来るのか誰にもわかりません。

「しかし、このことは知っておきなさい。家の主人は、どろぼうが夜の何時に来ると知っていたら、目を見張っていたでしょうし、また、おめおめと自分の家に押し入れられはしなかったでしょう。だから、あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子は、思いがけない時に来るのですから。主人から、その家のしもべたちを任されて、食事時には彼らに食事をきちんと与えるような忠実な賢いしもべとは、いったいだれでしょう。主人が帰って来たときに、そのようにしているのを見られるしもべは幸いです。まことに、あなたがたに告げます。その主人は彼に自分の全財産を任せようになります。ところが、それが悪いしもべで、『主人はまだまだ帰るまい』と心の中で思い、その仲間を打ちたたき、酒飲みたちと飲んだり食べたりし始めていると、そのしもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間に帰って来ます。そして、彼をきびしく罰して、その報いを偽善者たちと同じにするに違いありません。しもべはそこで泣いて歯ぎしりするのです。」(マタイ 24:43-51)

肉体の死を恐れることなく迎え入れられるように、無駄のない人生を選びましょう。今問題としていることは本当に問題なのか、何が大切なのか、すべては自分で選ぶことができます。その中で、キリストのからだの器官として生きることがわかった人には、神様はその人に何をすべきか仕事を任せてくださると言われます。いずれにしても、いつ肉体の死を迎えても平安でいられるように備えるよう、イエス様は教えておられます。

以上が肉体の死に対する備えとして、イエス様が語られていることです。今、一人ひとり問題を抱え、患難に出会っていると思いますが、もっとひどい患難が来ると主は言われます。それは、肉体の死です。しかし、その患難は、実はチャンスです。自分にとって本当に何が正しいか選択する機会となり、本当の自分を生きることができるときになるからです。死はいつ訪れるかわかりませんが、惑わされることなく、普段から備えて生きてい

きましょう。まだイエス様を信じていない方は、イエス様を信じましょう。これが黙示録の語るメッセージです。



イエス・キリストは、この地上で宣教を開始する際、「神の国は来た」と宣言なさいました。そして、苦難の道を歩み、十字架で殺され、よみがえり、神の国に戻られました。このイエス様の生涯は、私たちの人生のひな型です。

「神の国は来た」という宣言は、ダニエル書の預言の通り、神の国が成就したということです。それは、私たちが神の呼びかけに応答して霊のからだを着せられ、魂が神に返却されることはなくなり、「永遠のいのちを持つときが来た」ということです。肉のいのちだけで生きる日は終わり、永遠のいのちで生きる日が来たので、「終わりの日」と呼んでいる箇所もあります。また「魂がよみがえるとき」が来たとも言えます。

その後、イエス様は苦難の道を歩みますが、私たちもこの地上で多くの苦難に会います。しかし、この期間に私たちは神との関係を築くことができるので、それが私たちの信仰を育てる期間になります。イエス様はこれを「永遠のいのちを豊かにする」と言われました。

そして、肉体の死を迎えることが、個人の終わりの日でもあり、神の国が来たということでもあります。聖書が教える「終わりの日」という言葉を正確に読み取ろうとすると、「終わりの日」はこのように二つの意味で使われています。神の国という言葉も同様です。

黙示録は、私たちの体がよみがえるまでの期間に何ができるのかということを示しているのです。マタイにおけるイエス様の黙示録も、それぞれの福音書の黙示録も、内容は同じで、さらにそれを詳しく説明しているのがヨハネの黙示録になります。

つまり黙示録とは励ましなのです。苦しみを体験しても必ずよみがえるから大丈夫、必ず神の栄光が現れるから、どうか惑わされないで信じて御言葉にとどまって生きていきなさいという励ましです。

聖書は部分的に読むだけではなく、全体も読む必要があります。聖書は神が靈感によって書かせたものですから、すべて永遠の契約の約束に基づく統一性があるものです。その完成がヨハネの黙示録です。

各自が終わりの日を迎えるまで、それぞれが通過する苦難がありますが、必ずよみがえり、神の国に行くので、その間に何が大切か学び、イエス様を信じていきなさいという励ましが黙示録なのです。